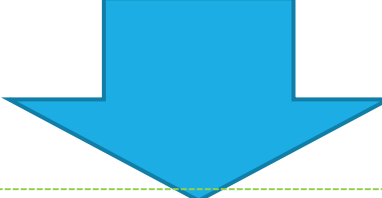


病気や障がいのある人の「きょうだい」のサポート事業 ～シブリングサポーターの養成～

本事業展開に至る経緯 ※「きょうだい」とは、病気や障害のある兄弟姉妹がいる方を指します。

本事業費の助成を受け、2022年度に「きょうだい」の語りを聴く講演会などを実施したところ、本学学生を含む参加者より「親とは異なる生活課題や複雑な心情があることを理解できた」といった好意的な反応を多数いただくとともに、「遠州こどもきょうだい会ミントモ」の代表者である川北令那氏との交流もはじまり、2023年度には「シブリング（sibling きょうだいの意）サポーターの養成研修」を静岡きょうだい会を含む三団体で共催した。研修には多くの方にご参加いただけたため、2024年度の行動目標を以下の通りに設定した。



2024年度の行動目標

- 1. 「きょうだい」である本学学生を対象とした講演会を継続して開催する
- 2. 昨年度の研修を踏まえた公開講座を開催する
- 3. 昨年度と同様の「シブリングサポーター養成講座」を継続して開催する



実施① 本学学生のみを対象とした講演会の開催

外部講師とのスケジュール調整がうまくつかず、今年度は開催できなかった。

実施② 「公開講座（病気や障がいを抱える 兄弟姉妹がいる『きょうだい』さんの気持ちを理解しよう!）」の開催

- 1. 講師:川北令那氏（遠州きょうだい会ミントモ 代表）
- 2. 開催日時・場所、参加者数:2024年10月15日(土)13:30～15:00、1705教室、64名
- 3. 内容・結果:プログラム構成:川北氏による講演「重い病気や障害のある子の『きょうだい』の支援～わが家のケースを踏まえて～」⇒グループ討議⇒総括

2022年に浜松で支援事業を開始した川北氏より、まず「きょうだい」には4つの側面があること、すなわち「医療・福祉現場での『見えない』存在であること」「家庭内での立ち位置がバランサーであること」「社会的資源につなぐりにくいこと」「青年期以降への影響があること」から、その支援の必要性が語られた。当事者支援と家族支援、ヤングケアラーときょうだいの関係についても触れられた後、ご自身の子育ての体験、ミントモ設立までの経緯などを説明してくださった。その後の参加者同士によるグループ討議では、私たちが「きょうだい」に「何をすべきか」を考える前に「何が必要とされているのか」について話し合っていた。10分程度という短い時間であったのにもかかわらず熱を帯びた討論となり、川北氏による講演に対するポジティブな感想が多数寄せられた。開催後のアンケートでは、5段階評価上位2段階の割合が合わせて96%となり、極めて高い評価となった。

5. アンケート結果・参加者の感想

川北さんのお話を聞き、当事者ですら気付かなかった「きょうだい」に着目し支援されている点がとても素敵でした。『娘さんの障がいを「乗り越えた」や「受容できた」ではなく、日々を繋いで今幸せと思える』といった一言が、私は親でなくきょうだいですが自分の気持ちがそのままピットリ言語化されたようであると感じました。

また、最後に多くの方の感想を聞き、講座には「きょうだい」を育てるお母さんが多く参加されていると感じました。私自身の葛藤もあり、私はそれに精一杯でしたが、母の気持ちや葛藤について気に掛けたことがなかったと感じました。私自身も妹のことで母に酷いことを言ってしまったり、きょうだいをいない存在として周囲と接していた時期がありましたが、明確なターニングポイントは分かりませんが、ある時を境に「自分は何をやっているのか」と吹っ切れるタイミングがありました。そこまでは長く時間がかかりましたが、今では家族で過ごす時間に幸せを感じます。きょうだいのことで精一杯な時期でなくなった今、母の中での葛藤、私の中での葛藤それぞれを思い出話のように話せる日が来れば日に来れば良いなと思っています。

実施③ 「シブリングサポーター研修ワークショップ」の開催

- 1. 講師:清田悠代氏（NPO法人しぶたね 理事長）、眞利慎也氏（同法人 プログラムディレクター）
- 2. 開催日時:2025年2月15日(土)第1部(知識編)13:00～15:30、第2部(実践編)15:45～17:15
- 3. 参加者数:第1部41名、第2部26名
- 4. 内容:プログラム構成:第1部 清田氏による講演⇒グループ討議⇒情報交換、第2部 工作等のワークショップ

第1部では、きょうだい、病気や障がいをもつ子ども、親の三者関係は‘モバイル’のようなものであるため一人の変化が他の人々に影響を与えることから、家族一人ひとりに適切なサポートが必要であるとの前提にたち、「きょうだいの気持ち」に焦点をあてて講演いただいた。きょうだいには「不安・恐怖」「困惑・恥ずかしさ」「罪悪感・自責感」「怒り・嫉妬」等のネガティブな側面がある一方、「精神的に成熟する」「洞察力が身につく」「いのちの大切さがわかる」といった‘積極的な側面’もあること等を説明いただいた後、小グループに分かれて「手紙」というツールを用いてきょうだいの気持ちを汲み取りそれにどう対応するか、活発な議論が展開された。

第2部では、複雑な心持ちになりやすいきょうだいが「諦め上手に」ならないよう、周囲の者が「きょうだい」を「助ける対象」として見るのではなく、「一人のこども」として捉え、こども自身が‘好きなことを楽しめる場’を提供するためのプログラムやツールを教えていただいた。開催後のアンケートは、4段階評価の上位2段階の割合が100%であり、実施②とともに極めて高い評価をいただいた。

5. 参加者の感想

このような活動があることを初めて知りました。私はきょうだいの立場として今回参加しましたが、もっと早く活動を知っていたらよかったなと思いました。小さいときはあまり感じていませんでしたが、大人になるにつれ自己形成で悩むことが増え、今回の講義を聞いて少し心が軽くなったことと、すごく刺さるものがありました。また参加したいと感じました。

いろいろな気持ちが起こる、わきおこることと、どんな体験を環境づくりをしながら進めていけばいいかヒントをいただきました。”制限される”部分への気配り、理解を、何らかの形にしていけたらという思いにさせていただきました。伴走する、その方法も、圧をかけず、人としてのしめる、おもしろがれる、はなせる関係づくりを大事にしていきたいと思いました。みんなで大笑いしていきたいですね！



結果・今後の課題

- 1. 成果
 - 1) 公開講座とワークショップを組み合わせで開催したことによる相乗効果があり、ワークショップが2回目開催であるにもかかわらず、開催告知後1カ月以内に応募が定員に達した。改めて西部地区において『きょうだい支援』に対する関心が高まっていることが証明された。
 - 2) 公開講座終了後に浜松市立幼稚園の発達支援アドバイザーの方から事業協力の申し出があったり、24年度より障害福祉サービス等の報酬改定で、家族支援加算に「きょうだい」が含まれるようになったことにより、本事業への参加者数に占める専門職者の割合が高まったりしている。今後は、きょうだい支援に関心をもつ社会福祉事業所等の研修ニーズを把握する必要があることが明らかとなった。
- 2. 課題
 - 1) 本学学生を対象とした講演会を再度開催することである。
 - 2) さらに本事業に協力いただける団体を増やすと共に、西部地区で独自の研修が開催できることを目的としたワークショップを開催することで、きょうだい支援ネットワーク構築に向けた基盤を形成することである。

《 プロジェクトメンバー 》	
代表者	福田俊子（社会福祉学部社会福祉学科）
協力者	井川淳史（社会福祉学部社会福祉学科） 川北令那（遠州こどもきょうだい会ミントモ） 沖侑香里（静岡きょうだい会） 山口智子（浜松市浜松手をつなぐ育成会） 伊藤さなえ（肢体不自由児当事者の家族） 丸山華奈（きためばえ 本学卒業生）
連携機関	遠州こどもきょうだい会ミントモ